
嘘と珈琲

らんちゅ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

嘘と珈琲

【Zコード】

Z6043Y

【作者名】

らんちゅ

【あらすじ】

恋姫の世界に来た京理、黄巾の乱や反董卓連合の戦いを経て辿り着いた先には何があるのか。

前作『夢の跡』の続編になり、設定を引き継いでいますのでそちらを一覧になられてから見ていただけたと良いかと思います。

チャイルドシート（前書き）

第2部はじめはじまりはじまつへ

チャイルドシート

? ? ? side

無駄に長いことがどことかそういう堅苦しい事は後で説明する。いや、そつせざるを得ないので勘弁してください。

「ちょっと、あまり動かないでもらえるかしら？ 座り心地悪くなつたんじやないかしら？」

「。。。。」

何故なら俺の膝の上に乗つてるサド氣質旺盛なこの女王様を何とかしたいから。
てか、乗つたの初めてだろ？ そもそも人間の座り心地が悪いってなんですか・・・。

「 つ。 」

それを微妙に苦々しく微笑みながり見る周りの皆さん。

桂花もその内の一人だが華琳にゾツコンの思いと板挟みになつてるらしく、頭を抱えてあたふたしてくる。

とある2匹？の小動物のようで凄く・・・可愛いです。

いや、普段の行動からするとこっちの方がレア度があるからその分上か。

俺の副長である莉羅と星は場所等関係無く怒り猛つている。

それさえ無ければ星はともかく莉羅は完璧なんだがね。

星はそれに加えてメンマ話を控えて貰おうかな。部屋に缶詰にされて8時間耐久とか勘弁してくれ。

今、莉羅と星を副長と言つたが正しくは違つ。俺は常に隊を持つて
いる訳ではないので側近という言葉がピッタリかもしねり。

「ちょっと、足動かさない！」

「・・・はい。」

私、宮京理みや きょうり20歳。

天の世界では成人を迎えるお年頃、と同時に別の大人への道に目覚め、もとい強制連行されそうです。
は!? まさか尻に敷かれるとは、この事を言つのか。
それの更に発展したものが・・・皆まで言つまい。
まさか人生の中でそんな事を知る事になるとは。人生一寸先は・・・
。

「で、俺はいつから華琳の椅子に?」

忌々しい金髪ドリルに話しかける。

「こつまでも、よ。といつより椅子と分かつていてるんでしょう? 話す椅子なんて聞いた事が無いけれど?」

そんな事をテスマイルで言つ。こいつは本気だ。
だけど、そんな笑顔でも可愛いんだよ、クソ・・・。

「せう? 天の国では喋る椅子はテフォ、当たり前だよ? 標準装備。」

そういうえば、ここからじや見づらいが椅子に座つていてる俺に座つて
いるせいでおそらくといつか絶対に足が地面に付いてない。

「ふつ。チャイルドシートみたいだ。」

ギュウ！

「あら？だから急に暴れないでもらえる？また座り心地が悪くなるわ。」

ケツを思いつきり抓られた。

迅闊たゞたあ！つしにちに来てからといつもの癖で横文字で悪口を言つてしまつた。

他の人は？マーケを頭に浮かべるだけなので大丈夫なのだが歎念ながら一刀と華琳には通用しない。

と、丁度良い。これについて多少搔い擣んで説明しようか。

長安、虎牢関の戦いにおいて俺達は負けた。正確には闘つて負けたのではなく降伏という形でだが。

第一回 かのじいだ時に居たる人物の功業才能と取扱説明に知られたくない為にそれは極秘にされた。

で諸侯達は確かに風評と言う物を得る事が出来た。

ここが華琳の凄い所だ。策に嵌めておいておきながら諸侯達は本来の目的である風評を『恥の上塗りをしていた』とはいえた為、強く言えない。

これが俺と華琳の共謀でした、というのなら話は簡単だつたが今回諸侯達は結果として自分達が欲しかつた物を手に入れている。特殊なタイプの飴と鞭、だろうか。

簡単に言えば、貴方達を騙しました、でも私のおかげで風評は手に入つたでしょう? というスタンスだ。

そこには、それを横暴だ! というのなら亡き董卓を攻めた上、私の掌で踊らされていたお馬鹿さんという事を言いますよ? という事を暗に仄めかしている事も含まれている。

諸侯達は董卓を討伐したかったのではなくその副産物である風評を得たかったのが、華琳には分かっていた。

劉備のように本当に國の為、ひいては民の為を思っていた者も居たが大半は風評が目当てだったのが事実である。

華琳を悪者だ! と言つて自分も悪者です! と言つた式が出来上がっている訳だ。

華琳こえー

と、言つたらまたやられそうな
ギュウ! !

「ぎやああああああああああああ! ! !

はい、完全に心読まれてました。

閑話休題

会議で俺達は生きる為に降伏と言つ形を選んだ。

事実、あそこで俺が諸侯を皆殺しにしようが数の暴力には敵わない。

おそらく両側から軍を前に進めるだけでじゅうが壊滅するのは目に見えていたろう。

諸侯の、自分の命懽しさに賭けたが華琳が居る時点でアウトだった。少し意外だったのは鮑信もそれに気付いていたという事だが。ともかくその時華琳は独断で俺達を華琳の傘下に入れる事を条件に出した。

もちろん反対の嵐だったが、俺自身がOKを出したのと手柄を曹操軍が全て放棄する事で合意に至った。

これは桂花と風の考え方らしいが、今回の戦いで俺の価値を再確認出来たらしくそれに比べれば今回の風評等ちっぽけな物らしい。

最後まで反対した人物？それはもちろんその意味を知る鮑信。

何度も他の諸侯にその危険性を伝えていたが、既に目的の物を得てもう曹操に関わりたく無かつた諸侯には分かってもらえずそのまま多数決で決まった。

で、今居るのがここ、許昌という訳だ。

俺はあつた事知った事を全て詠達に告げると、曹操は本当に同じ人間か？って返事が返ってきました。

正直、今までの話は俺にとつては本当にどうでもいい。

華琳が姉であるかどうか、これだけを聞きたかった。

が、許昌に着いてからからいきなり膨大な書簡（全体のおよそ1／4）を俺にだけ渡され、それを全て処理するのに2週間ほど掛かった。

朱里や離理、一刀等色々な人物が差し入れに来てくれた。

だが、ある一部の人物は自分を差し入れと評してそいつから侵入してきたのは全然些細じゃない余談である。

それをようやく終えたと思つたら

『大した早さね。さて、次は椅子になりなさい。』

そして現在に至る。

「華琳、お前は俺の姉……で良いのか？」

急にそんな事を口走つてみる。

「違つわ。」

・・・。

「私はそんな事一言も言つてないけれど？」

口調は違えどこのサード氣質でいやらじこ嫌がらせをしてくるの少女、絶対姉さんだ・・・。

が、その後も得意の話術で言い包められて結局未だに確証は無いのが現状だ。

「さて、とつあえず『紹介は済んでるわね？』

マジな声を出しているがそれが俺の膝の上から発せられているのは何だか悲しい。

「あのやつ、話の前にそろそろ降りない？」

「嫌よ。」

「一応聞くけどなんで？」

「貴方は私の物でしょ、う？」

想像通り過ぎて泣いた。

チャイルドシート（後書き）

感想、評価よろしくお願いします。

しばらく拠点の話が続きます？

2話目です。
感想・評価ありがとうございます。

雪蓮 side

「あへ、むかつくわね。」

降伏の件で京理含む董卓軍は華琳の下に付く事になつたが、袁術と私達は自由にしていいと言われた。

今考えても腹が立つわね！」

曹操の、まるで京理さえ手に入れれば私達は田に掛けるまでも無いというよつなあの態度、無理矢理京理強奪すれば良かつたわ。だけど、もつと気に食わないのはそれを京理が認めたという事よ。

「姉様、田頃から言葉は選んでください。」

「はいはい、口づぬさい妹ね。全く誰に似たのや。」

「何か言つたか？」

振り向くとそこには我らが軍師、眞琳がいた。

「何でも無いわよ。」

・・・口づぬわよと言えば我が軍の2大人物ね。

「また、京理の事でも考えているのか？」

「ヤリと口を歪ませながら言つてくれる。

「ええやつよ！あ～もつ曹操もムカつくなぞ京理はもつとムカつくなぞ

「！」

「はあ。雪蓮、いつは考えられないか？」

「何よ？」

「私達には孫県の再興という田標がある。唯でさえ袁術の下で密将なんかをやつしているところに今回の戦いで風評すら失つてしまつたら我々はどうなる？」

「あ・・・。」

「絶対に勝てると書いて誘つてきたのは向ひつだ。」

「であればこんな結果になつた今、周りに聞 京理としての敗北と曹操への降伏をこの戦いの表顔とする事で、それを印象付け、我々への意識は確実に小さくなる。」

何しろ、あんな事があつたなら諸侯達は尚更だ。」

「・・・でも。」

「お前も、京理の意図が知りたくて今もここに居るんだらつへ。」

「・・・そつ、私達は今許昌に居る。」

「あの戦の後、曹操に無理を言つて付いてきたのだ。」

「だつて、勝手に言われて納得できる筈無いでしょ？。」

「それに京理と仕合つのだつて楽しみだつていうの。」

「まあ、確かに曹操の下に付くのは苦痛だけね。」

「ただ私の戦心が京理を求めて仕方無いのよ。」

だつて、冥琳より頭が良いかもしれない上に武勇においてはあの田布をすら凌駕するんでしょう？ 絵に描いたような最強。武人がこんな人間に興味を持たない筈がない。

京理 siide

不幸とは突然やつてくる。

「といつ事で明田面前から仕合するから。」

こんな風に・・・。

ノックもせずに部屋に入つてきた途端そんな事を言いだす江東の虎の娘。

ああ、そういうえばそんな習慣無いんだっけか。

「一言田がそれか。拒否権は？」

「無いわ」

キラッ、じゃねーよ・・・。

「で、華琳はそれにつけていくと思」

「許可。」

「・・・ McCoy。」

一縷の望みに賭けたけど案の定でした、はい。

「ふふ、ただし孫策よ。」

「何よ?」

名前を呼ばれて明らかに不快そうな顔をする雪蓮。やつぱり降伏には納得しないからか敵意を剥き出しにしている。

普通の君主ならその時点でもうアウトだが流石華琳、器がでかいよ。

「どうせなら大会を開きましょう。京理と戦いたいって人間は貴女だけじゃないのよ。」

「は?」

「形式は?」

「そうね・・・。トーナメント、勝ちあがり形式がいいわね。」

「追つて連絡するわ。」

「あの」

「場所と日時は?」

「ちょっと」

「分かったわ。」

今までの話、雪蓮が部屋に入つてきてからほんの150秒ほどの出来事でした・・・。

「・・・あの、華琳さん？」

「何かしら？」

斜め前に座っている華琳を見ると恍惚とした表情をしていた。

そう、昨日よつやく喋る椅子を卒業する事が出来た俺は2週間振りに膝の上に何も乗せない生活を送っている。

つて、そんな事は今はどうでもいい！

どりでも良くては無いけれどこれに比べれば！

「ルールはどうあるんだよ？」

「形式はさつきの通りで、大会優勝者が京理への挑戦権と1日ギート権を得る。

立ち位置的にはスーパーチャンピオンひとつにひるね。」

横文字に横文字で答える華琳に違和感を感じなくなつたのは俺が变成了つたからだらうか。

つて・・・。

「1日ギート権！？なんだその券みたいなのは。

天の国では人権つてのがあつてな、それによると俺にも拒否権という物が

「ここは漢よ？」

「・・・そうですね。」

話術じや勝てねえ・・・分かつてたけど。

思えば話術だけなら華琳が最強、次点で風などが入るが俺にはそこまでの話術は無い。

てか、急展開かつテンプレ過ぎて何か付いていけないよ・・・。
とりあえず、参加できない文官の反発は凄そうだな。
なんて今でも客観的に考えていられる俺は凄いと思つ。

莉羅 side

「せいつー。」
「やあー。」
「つぬあー。」
「ぶるああー。」
「たあー。」

最近妙に鍛錬場の使用者が多いと思つたら成る程、そういう事ですか。

城内にある貼りだしを見ると『天下大会』の4文字。

何の飾りも無いその言葉に感動を覚えました。

曹操殿、これは京理様争奪戦と考えていいのですよね？

そう考えると不思議と一矢けてしまつ。

見た感じで出場しそうなのは愛紗、鈴々、星、恋、華雄、夏侯惇、
夏侯淵、許チヨ、典韋、樂進、雪蓮、孫權、黃蓋、甘寧、周泰と言
つた所でしょうか。

私も含めて16名・・・かなり多いですね。

目的としましては、京理様に対して不埒な考え（色恋事含む）を抱

いている輩を排除する事。

それに、もし優勝できたなら合法的かつ白黒堂々と・・・やれる。

莉羅に対して一言

「今日のお前が言つたなスレはここですか？」

戦闘シーンを描けない作者自身に喝を入れるかの如く無理矢理大会を開催するという暴挙に走つてみました。

夢跡では文面の活躍が多かったので今回は武将にスポットをあててみます。

感想、評価よろしくお願いします。

前夜考察（前書き）

前話の調練場に一人変な声が（ry

華琳 side

桂花を闇に侍らせている中、ふと気になつた。

「桂花、貴方はどう見るかしら?」

「大会の事でしょ?」

「… でしたら呂布を筆頭に關羽、張飛、趙雲、孫策、馬鹿猪。この辺りが上位に食い込んでくるとは思います。ですが、この戦いにおいて優勝するとしたら… 私は羊コと考えます。」

急に決まった催しだつたが真桜に無理を言って徹夜で会場を作つてもらつた。よつて、大会は明日から行われる。

「羊コ?あの京理の側近の?」

「はい。」

「文武両道の王道を往くよつたなイメージだつたのだけれど…。」

「理由を聞かせてもらえるかしら?」

「…あの人物はそもそも人の下に付くよつた人物ではありません。」

「なぜそう思えるのかしら？そして勝つと思われる根拠を聞かせて頂戴。」

「羊口の背中を見た事が無いからです。」

「それは文字通りの意味？」

「はい。」

武人でも無い文官である桂花がそう断言できるのだから余程の事なんでしょう。

確かに私も一度も見た事が無かつたわね。

普通に生活していてそんな状況には成り得ない。

隙を見せないにしても少し異常だ。

それを自然に出来るのだからかなりの鍛錬を積んだんでしょうね。

何の為に？

それは分からぬけれどそりせざるをえない状況にあつたか、この乱世の中で必要だったから、はたまた愛する者の為に・・・なんてね。

「で、それが今回の大会にどう関係するのかしら？」

「その羊口が異常な執着を見せる程の人物が言わざと知れた京理様です。そして羊口はその半国の器の名に恥じぬ所かそれ以上の結果を出した人物とずっと一緒に居た。

・・・純粹な武で言えば京理様を除けば呂布が頭一つ抜けています。が、経験というのは得難い物です。それがいざれ英雄になるお方の側に居たというのなら尚更の事。

華琳様、これは私の願望ですが。

戦ではなく、一対一の戦いにおいて知が武を上回った時、その先に何があるのか私は見たいのかもしれないです。

それが私にとって何の意味を為すかは分かりませんがこの先の私が華琳様の支えになる時の一つの鍵になる気がします。」

「えらく評価するわね。」

「文官の私が何と言えばいいのか分かりませんが、知力はもちろん純粋な武においてもあの女はかなりの物の気がします。」

「能ある鷹は爪を隠す、という事かしら?」

「予想としましては呂布に及ばずともそれに近い力を有している気がします。」

「これは驚いたわね。」

軍師は希望的観測はほとんど言わない。特に桂花のような者なら尚更だ。

「羊」はここに居る中でおそらく一番京理を支えてきた人物。隠してきた実力、そして京理との生活の中に何か得る物があつたらしたら?

「ふふ、これは丁度良いわね。」

今回が皆の実力の良い指標になるかもしれないわ。

「桂花、明日が楽しみね。」

「はい。」

外を見ると太陽が一日の仕事を終え、辺りは完全に黒に染まつていた。

京理 side

「ふう・・・。もつこのパターンやめようよ、ねえ。」

小鳥の鳴き声が朝を報せる。

体を起こすといつもの如く当たり前のように俺の部屋に侵入している星と莉羅、それに風、恋、朱里、離里 + 数匹。

前までは詠や桂花、愛紗や桃香も居たが詠はここに所すつと部屋に引き籠つていて、少々気がかりだ。

桂花は華琳と夜の・・・。

まあ、それは置いといて、最近は鍵をかけると毎朝ドアノブが切り取られた状態で発見される 修理、これの繰り返しになるのでもう完全にオープンにしている。

が、それを受け入れるという意味と勘違いされたらしく政務も俺の部屋に持つて来てやるうとする位だ。

勘弁して下さい・・・。てか、物理的に無理だからね？ 8畳だよ？ こい。

そういえば、あそこに居た頃はもう一人居たな・・・。

守る事も出来ず最期を見る事も叶わず、そして俺達が負けた事で免

罪も冤罪で無くなり

・・・俺はあの子に何をしてあげられたのか。否、何もしていない。
理想だけを追い求める者は理想を抱いて死んでしまえばいい。
みんなを守る事とある一人の少女の疑いを命を賭けて晴らす事、そ
れは天秤にかけていい物でもないし比べる物でもない。

でも、心のどこかでそういう風に自分を言葉で覆つてしまつてゐ
ていうのは、闘う前から諦めたつて気持ちがあるつて事なのかもし
れない。

自分が思つてゐ事なのに・・・分からなこよ。

「・・・朝から悲しそうな顔をしていますな。主を笑顔にするのも
側近の役目ですからこはは元気になる事をしなければ。」

「ヤリと笑つ星。

「その通り、ですがそれは私の役目ですよ?星。」

・・・こや、半裸でそんなこと言つてんじやありません!」

「お兄さん、今日は何井ですかー?」

「そんなこと言つてどうじやありますかー!」

「こんな子に育てた覚えは無いぞ!」

「おうおう兄さん」

「黙れHOKUEI!言わせねーよ?」

あくまで風の頭の上（こゝ）

とつあえず、奴が喋る内容は口クな物が無い。

「あ、あのでしゅね！私達は

ペロペロ

「であつて」

ペロペロペロペロペロ

「・・・嫌い？」

ペロペロペロペロペロペロ

「「「あん、セキト」」」周々、善々俺が悪かつたよ。嬉しくからもいつも
めで？」

朱里と離里はペロペロ音で搔き消され、恋に至つては何の事を言つてこぬのかまるで意味が分からない。

とこり事で

「嫌いじゃなこよ。」

つて言つしか無くなる。

そして許昌に来てからこのやつとつを毎日続けていく。

朝の時間濃すぎるだろ・・・。

ちなみに恋のペット達はここに来る時に、パンダ達は戦について来ていたらしるので俺の部屋付近は軽い動物園である。とつあえず周

泰が良く来るけど、たまに甘寧が見れる。

それを眺めるのが俺の数少ない心のオアシス的存在になつていて、
ていうか・・・

「何で雪蓮まで居るんだよ・・・。」

「つあえず一通りシッ！」を終えて冷静に考えたら普段居ない奴が
居た。

「スースー。」

おやおや、孫興の王様は良く寝る子なのね。

・・・雪蓮と恋は戦になると人が変わるからねえ、ちょっと得した・
・・のか？

「普段も可愛いけど寝顔は見物料取れるなあ。」

ダメだこりや、周りに可愛い女の子がいっぱい居るともじりうつ
目でしか見れなくなつてきそうだ。

これから始まる大会の事を考えてみた。

「誰が優勝するんだろうねえ。」

1番闘つてみたい相手・・・と言つたら実は杜預なんだけど出るか
も分からぬいやつぱり決勝は恋かなあ。

「ふ、そんな物。私に決まつていいだろ?」

声の主はバンッ!と大きな音を立てて扉を吹っ飛ばして入ってきた。

「・・・朝から元氣ね、華雄。」

ハハハ、これで扉の修理費また華琳に借金ダヨ・・・。

ともかく、月。俺はみんなと元氣にやつてます。
お前もここに居れば、とかそういう事は口に出せないけどやつぱり

会いたいよ・・・。

前夜考察（後書き）

ネタ路線でいいつとしたら二つの間にかひょっびりシリアスになつてました。

次回から戦闘描写となりますが過度な期待は禁物です。
で、誰と誰とを闘わせるかまだ全然考えてないんですが希望あれば
お願いします。

開催（前書き）

リクエストは無かったので初戦はテケトーに決めました。

実況とかも考えましたがマンドクセってなつたので省いてます。
というか戦闘自体もVS京理も含めるとかなりの回数あるのでどう
かすっ飛ばす可能性高いです（笑）

評価、お気に入り登録して下さった方々ありがとうございます。

京理 side

現代の10時頃に大会の開会式は始まった。

運動会で言うスポーツマンシップ云々を愛紗が長々しく語っていた
が一部を除いて皆スルー。

何を言おうがこの時世、勝った者勝ち、所詮は弱肉強食なのだ。

『正々堂々?どんな手を使ってでも勝った者が栄光を手にするのよ。

』

つて、このお隣の方が言ってました。はい。

「おいおい、物騒なこと言つなよ。それに同じ条件下つていうこの
いう大会だからこそみんなの実力が分かるんじゃないか。」

ナイスだ一刀!その通り。

「何も分かつていない天の御使いかぶれの貴方は黙つていなさい。
相手よりも多くの兵を、それが兵法の基本でしょ?」

その時点での戦乱の世でそもそもそんな同じ条件下の戦いになる
なんて状況がどれだけあるのかしら?少なくとも貴方がここに来て
からはあつた?」

「・・・無い。」

一刀、喋り始めて早々敢え無く撃沈。

そりやそうだ、一刀は弱小の、勢力と言えないような義勇兵の集ま

りから始まつたのだ。

ここまで生き残つてゐるのにむしろひより策を弄したのではな
いだらうか？

いくら率いる武将や軍師が強くても勝てる訳ではない。それだけの
兵力差が周りとあつた。

知識だけだつたのかは分からぬが少なくとも一刀は桃香達の勢力
において重要な役割を果たしていただろう。

だから、出来ればそのまま天下にまで突き進んで欲しかつたが桃香
は俺に付く事を選んでしまつた。

俺はなかば董卓軍の有利の為だけにここに居る事を許可したが、正
直桃香は少し甘いだけで今ならまだ上を田指せるんじやないだらう
か？

今でも、劉備軍全員がこのままでいいと思つてこよつがそれを俺が
それを納得している訳ではない。

「どんな天下無双もそれ以上の策に嵌れば勝つ事は出来ないのよ。」

ニヤリと色っぽい笑みを浮かせながら華琳がこちうに顔を向けて
くる。

そして、そんな光景を眼力で人を殺す位の強さで見てくる元董袁連
合の監様。

「華琳、お前本当に殺されるぞ？」

顔を近づけ小声で言ひと、

「その前に私にこんな事をしている貴方が殺されると思ひのだけれ
ど？」

「・・・へ？」

周りを見渡そうとすると目の前には既に莉羅、桃香、愛紗の3人が満面の笑みで立っていた。

「主、曹操殿に今度はどんな甘い言葉をかけたのですか？」

・・・ああ、傍から見るとそう見えなくもないね。

少々お待ちください

「・・・大変な目にあつた。つと、第一回戦最初の組み合わせは星と周泰か。」

どちらも速さに特化してるけど周泰はこの中でもスピードスターだからな。

正直に言つて速さ勝負だけだと・・・

「どうか、もう始まつてる？」

田の前はお互に力の限りを尽くして戦つ一人の姿。

「お前がブラックアウトしている間にな。」

「一刀、起じしてくれよ！」

「じめん、ちょっと気分良かつたわ。」

「いつロス……。

「つと、審判は張三姉妹か。あいつら巡回公演から戻ってきたんだな。」

華琳は張三姉妹のファンを増やす事でそいつらをそのまま軍に誘い吸收。

そしてそいつらにたまに公演を見せる事で士気向上にもなり、本人達もやりたかった事が出来るという事で今も頑張っているようだ。

「あの子達は今田はいつも以上に頑張つてゐるわよ。」

「せうか、聞くだけでなく実際に頑張つていつのはこんなに気持ちのいい物なのか……。」

失われる筈だった人の笑顔を守れたつていつのはこんなに気持ちのいい物なのか……。

天下を田指す理由がこんなちっぽけな物でも充分なんじゃないだろうか？

星 side

「ふ、我が勇姿、一番見て欲しい人は考え方か・・・。」

愛紗じやないが、後できつい灸を据えるとしよつ。

「余所見なんてしてて大丈夫です、か！」

「ぬつー。」

3回斬つてくるか。袈裟切りからの突き、そして回転切り。どれもキレがあり申し分ない速さがある。

特に回転切りは曲芸のような動きだがなるほど、理に適つてゐる。力という身体の特徴差を埋める為に遠心力を利用する、単純であるが周泰程の速度があれば充分武器に成り得るだろつ。が、

「それが残念ながら主の前なのでな、負けよつとも思わないし負けられないのだ。」

好いた男の前では格好つけたくなるのが女の性だろつ？ふつー！

ガキイ！

「つー。」

そのまま一度お互に間を開ける。それが出来れば私は槍で周泰は刀

とかいう剣だ、いくら長物の剣とは言え槍には劣る。

であれば武器の攻撃範囲の差と純粋なぶつかり合いだけなら私が負ける可能性は限りなく低くなる。

それでも周泰は私と同じ速度重視の闘い方だ。同じ速度重視と言つても奴の速さは大陸一なのではないかと思う位なのが問題なのが・

一瞬の気の緩みが勝敗を分ける致命的な物に成りかねない。

今の攻撃で尚更に距離を取れた事は大きいだろう。

「ふ、それで終わりか？周泰よ。一武将として孫雲の名が泣くぞ！」

？

「つ……言わせておけば！はつ！」

キレはあるのだが怒りに身を任せた攻撃で至極単調。そして間合い外からの攻撃、であれば私が避けられない道理は無い！

「はあ……」

ガキイイイン！

「あつ！」

斜めに振り下ろした刀を身を反らすだけの最低限の動きで避けながら逆に周泰の間合い内に入り込み、己の槍を半分程の短さで握り素早く相手の武器に向かつて振り下ろす。

後はそのまま穂先を前に出す。

「……私の勝ちだな。」

「勝者、趙雲！」

地和が勝ち鬪のよつに高らかに叫ぶ。

「あうー。」

ふむ、やはり勝者の立場というのは気分が良いな。
これで主が私の勝ち様を見届けていてくれたなら・・・
そう思い、半ば諦め気分でそちらを向くと

「良くやつたな、星。まずは初戦突破な、おめでと！」

主が私の活躍を見てくれていた。
どうでも良い事だがそれだけで嬉しくなつてしまつ。これもまた惚
れた弱みなのだろう。

ナ♂テナ♂テナ♂テナ♂テ

「つーそれで私が喜ぶと？」

「うん。」

即答。流石は主・・・敵いませんな。

開催（後書き）

ん？最近何故か一刀を無性に応援したくなる気分になつてきた。とりあえず、結構こいついう大会ではあて馬的存在の凧を頑張らせてあげたい！

引き続き対戦の組み合わせ募集しております。

変わる物と変わらない者（前書き）

どうしてこうなった。・・・。

変わる物と変わらない者

京理 side

「うーん、周泰は惜しかったなあ。」

試合終了後、開口一番に残念そうな顔を浮かべながら四つ一刀。

「純粹な速さで言えば周泰の方が上だからな。それだけに星に言葉で惑わされたってのは少し頂けないね。

どんなに速さがあるうと、どんなに技術を持っていても、それを100%発揮するだけの胆力が無いと意味がない。

まあ、戦場でなく今分かる事が出来たんだからこの大会にも意義を感じられるようになつてきたな。」

「100ぱーせんと?」

「完全にって意味だよ。」

しかし、この戦い裏を返せば星が如何にクレバーか分かるんだが・・・まあ、気付いているのはほとんどいないだろ?し言わなくとも良いか。

それに星の視線が言つたつて言つてるからな。秘蔵メンマをとられた時のような殺意にも似た顔をしている。
まあ、いい。それより

「人和、次の対戦の組み合わせ教えてもらえる?」

「ええ、久しぶり。次は、張飛ちゃんと羊口さんよ。」

「！？」

・・・マジか。

「京理、貴方はどう見るかしら？」

「おそらく莉羅の勝ちだな。」

いや、むしろ断言でれる。

「何故？」

「自分で言つのもなんだけど、今分この大会の景品が景品だからな。
・・。」

「「「「・・・なるほど。」」」

満場一致だった。自分の事じゃないけど目から何か出てきた。

・・・今まで何度も何度か言つてきたけど、あれさえ無ければ非の打ち所がない人物なんだが、そのあれってのが色々致命的だからねえ。
まあ、それが無かつたとしても華琳や雪蓮のように上に立つ人物か？つて聞かれたら答えはNOかな。

王を補佐する事に異常な才能を示す者、王佐の才にこれ程恵まれている人物はこの大陸どこを探してもそはないだろう。

問題はその王が事象に絡むと状況判断能力が著しく低下するという唯一にして最大の弱点ではあるけどまあ、それもやりようによつてはね。

鶏口牛後、こんな言葉があるが莉羅はまさにその正反対だと思つ。

小さな組織ででかい顔してゐる莉羅は想像できないからな。まあ、逆に大きな組織で軽んじられている事もあり得ないが……。頼めば大抵の事が出来る何でも屋。前に1分以内に春灯を俺の部屋について冗談で言つたら40秒で連れてきたからなあ。

例が悪いが、とにかく莉羅という存在は大陸でもかなりの器を持つている者。JUNO・2に対する適正、才能であれば大陸一と断言できる。

・・・しかし今更だが春灯酷い目にあつたのかな？まあ、今言つても仕方ないから今度体でも洗つてあげるか。

あいつには迷惑かけたな。

ヒヒン。

・・・でも、それ直接的には俺のせいじや無いよね？

ヒヒン・・・。

閑話休題

「鈴々莉羅お姉ちゃんには負けないもんねー。」

「ふふ、そうもないかないのです。私は勝たなければならぬのですよ・・・・・景品的に。」

「「「「「・・・・・。」「」「」「」

最後の部分が無ければカツコよかつたのに・・・このお馬鹿野郎。

「もう、なんか初戦よりみんな元気が無い気がするのだ。」

「そんな事無いぞ、俺が応援してるからな。」

「こやは、じやあ頑張れる気がするのだ。」

「・・・なんて現金な奴だ。」

義妹を嘆く姉の構図

「まあ、いいじゃないか。それに・・・気になるからね。」

「陶酔が可愛く見える程の異常な執着心と燕人張飛との勝敗の行方がか？」

「ちげーよー。」

真顔で言つてるから恐ろしい。

てか、執着心∨S人つてどういう状況ですか？

「ええ、そうですね。一般的に考えて莉羅のそれは俄かには信じがたい話ですが是非で言えは是と言つしかありませんからね。気にもなるものです。」

「・・・愛紗までそういう事言つんだ。」

まあ、確かにそなんだけどね。

「！？あ、いえ。あのですね、私は一般的な意見を述べただけであつて決して私自身が嫌いとかそういうのではないのです！」

・・・一刀、ずっとこれと生活してたのか。色々ときついな、主に精神的に。

「はわはわ！」

「あわあわ！」

そこのおおむねじている小動物さん小動物さん、そこまで慌てられた状態でそばに居られるところちがはわあわになるんだけど？

「まあ、いいか。時間がもつたいないし始めようか。」

・・・それに華琳が怒りそうだし。

「私の捕虜である貴方に対して命令よ」

「へ？」

「大会後、三角木馬の刑だから。」

憎々しいデスマイルめが・・・。

莉羅 s.i.d.e

「相手は鈴々ですか。」

田の前に居る朝一番に食堂でみんなに虎わんパンツを穿いていると
カミングアウトしてきた子供を見据える。

頭はちよつとあれですが武においては天性の物がありますからね。

「お姉ちゃん、手加減は無しなのだ。」しつも本氣でこくよー。」

「分かっていますよ。それはやつと今は脇前、おなか減つていませんか?」

「減つてゐるナビ・・・これで勝つたら原理お兄ちやんに『』馳走して
もらえるからとつと終わらせるのだー。」

ウラヤマ・・・京理様には色々と聞きたい事がありますね。

「よーし、やるがーー。」

メラメラと顔を立てて「ますがはーたー、びつしまじょうか。
燃え盛る火に対抗するにはどうすればいいか、答えは一つ。

「じゃあ、始めましょうか。」

水をかけてしまえば良いのです。

「うそ、こいつよーーたあーーせいせいせいせーーー。」

「くわーー。」

横薙ぎしてからの突きの応酬を3歩程大袈裟に距離をとる。鈴々の武器の大きさはこちらのかなりの不利の要因になりますがこいつやって懷にはい

「させないのだ！」

ガキイン！

・・・れませんね。

剣の横つぱりを鈴々の槍に沿つよーーたりよーー滑るよーに近づいたがそれを槍を回転させ柄で足元を攻撃してきた。

野生の勘、とでもいいましょうか。戦いにおいて必要である最低限の動きが頭ではなく本能で分かっている。

京理様のように相手の予想を遙かに上回る速さで攻撃できる訳ではないのでそれ以外で私が攻撃を入れる方法・・・ふふ、すぐに浮かんだら誰も苦労しないですね。

「まだまだいくよーーでやでやでやーーー。」

「ぐうーー。」

再び突きの応酬、槍衾とはまさにこれの事ですね。一人でそれを体現できるとはいやはや、燕人張飛の名に一片の偽りなしですね。

「 もう ． ． ． どう じ ゃ う か 」

変わる物と変わらない者（後書き）

感想お願いします

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6043y/>

嘘と珈琲

2011年11月27日08時51分発行